

DATA：薬剤部

- 薬剤師 32名（うち非常勤 3名）
- 専門・認定薬剤師等：がん専門薬剤師 1名、がん薬物療法認定薬剤師 3名、外来がん治療認定薬剤師 1名、感染制御認定薬剤師 1名、緩和薬物療法認定薬剤師 1名、栄養サポートチーム専門療法士 2名、医療情報技師 1名、日本糖尿病療養指導士 3名、腎臓病療養指導士 1名、小児薬物療法認定薬剤師 2名、漢方薬・生薬認定薬剤師 1名



◀薬剤部 HP

薬剤師に求められる専門性

当院の薬剤部は薬剤師 32名（うち非常勤 3名）、助手 6名で業務を行っています。地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院などにも指定されている二次医療機関の薬剤部として高い専門性が求められることから、様々な分野の専門・認定薬剤師が在籍しています。例えば「がん薬物療法認定薬剤師」は、がん化学療法を行う患者さんに対し、薬の種類や効果、投与スケジュールを説明するとともに、治療によって起こる副作用やその時期、対処法などについても説明し、不安や相談に応じます。

また、院内の医療チーム（緩和ケアチーム、褥瘡対策チーム、栄養サポートチーム、糖尿病チーム、認知症ケアチーム）の輪にも、多くの薬剤師が参加しています。チームに在籍する多職種のスタッフとともに患者さんの情報を共有したうえで、薬剤師としての視点を活かし、薬剤の重複や相互作用、配合変化といった情報を提供し、的確な治療が行えるように活動しています。

加えて、薬剤師特有の資格ではありませんが、電子カルテなど病院情報システムの開発・運営・保守などの業務に対応できる医療情報技師の資格を持つ薬剤師もおり、日々変化していく薬剤情報や様々な知識を駆使して業務にあたっています。

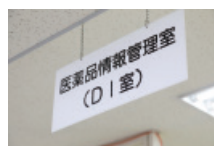


病院薬剤師としての広範な責務を担う

総合病院で多くの業務を担う

総合病院の薬剤部では、様々な診療に対応できるよう多岐にわたる業務を担っています。

調剤業務では、医師の処方箋について用法・用量、薬剤の相互作用を確認し、必要な場合には医師に疑義照会を行ってから調剤しています。処方の中には注射薬の調剤もあるため、処方監査を行った後、調剤を行い、病棟へと運びます。抗がん剤については細胞毒性などのリスクが高い薬剤も多いため、「抗がん剤調製室」に設けた安全キャビネット内で、教育を受けた薬剤師が慎重に混合調製を行っています。



また、各入院病棟には専任の薬剤師が常駐しており、病棟スタッフとして入院患者さんやそのご家族と面談し、持参薬や服薬状況などの情報を収集しています。さらに、調剤室から送られてくる薬剤が現在の症状に適切かどうかを看護師とともに確認してから投薬します。病棟スタッフからの薬剤相談に応じたり、患者さんに薬剤の説明をしたり、薬剤の効果や副作用の確認などの細かな業務も行っています。最近では、入院前の患者さんと面談し、入院までの服薬について指導するといった、PFM（Patient Flow Management：外来から退院後までの入退院支援）に関連した業務も行っています。

薬剤部のもうひとつの業務は、医薬品とその情報の管理です。医薬品情報管理室（DI室）では、新薬に関する情報を製薬企業や、PMDA（医薬品医療機

かかりつけ医、患者さん、地域の架け橋となるように

薬剤部

器総合機構)に出された申請資料などから収集し、薬事委員会に提出します。また、安全性情報が出た場合には、院内の医療スタッフに向けて情報を発信して注意を促したり、医療スタッフからの質問に答えたりする役割も担っています。

保有する医薬品の適切な温度・湿度管理のため、温度・湿度の確認・記録と定期的な使用期限チェックをしています。加えて麻薬、毒薬、向精神薬などは施錠管理し、数量、廃棄量などを記録して安全な医療に貢献しています。こうしたあまり表に出ない業務も、薬剤師の重要な役割です。

多剤併用の現状

高齢者は抱える疾患も多く、複数の医療機関から処方された多くの薬剤を服用していることが少なくありません。それによって有害事象が起こるリスクが高まったり、同効果の重複といった問題が起こることがあります。これらの問題に起因する多剤併用のことをポリファーマシーと呼んでいます。

ポリファーマシーへの対策は国も取り組みを始めており、入院前に6種類以上の内服薬が処方されている患者さんについては、入院期間中に減薬への取り組みを行い、退院時に2種類以上減らすことができた場合などに保険点数の加算が認められています。このポリファーマシーは、薬剤部にとっても重要な課題であり、患者さんからの聞き取り、そして多職種カンファレンスを通して、減薬のための調整を検討しています。

しかし、当院は急性期病院のため平均在院日数が短いことや、退院後に主治医となるかかりつけ医との連携・調整など、簡単には減薬できないという状況もあります。そうしたなかでも、患者さんから薬剤が多い、飲み切れないなどの訴えがあれば、慎重な検討のもとで減薬しています。

真の薬薬連携を求めて

院外処方箋発行率は96%と高く、地域の保険薬局に調剤のほとんどをお願いしています。つまり当院の薬物療法のおよそ半分は、地域の保険薬局が担っているということです。

そのため、私たちは地域の保険薬局との連携強化に努め

ています。①薬剤師会を通して当院採用医薬品の変更リストを配布する、②院外処方箋には直近の臨床検査値を記載して、調剤の用量チェックや副作用の早期発見の参考にしてもらう、③がん薬物療法についてはレジメンをホームページに掲載する、④当院外来患者さんに指導や聞き取りをした情報「薬剤サマリー」を処方箋とともに保険薬局宛に発行する、⑤入院患者さんについても退院時に「薬剤サマリー」を保険薬局宛に発行する、などの様々な取り組みを行っています。

そして、こうした様々な情報のやり取りについて地域の保険薬局の薬剤師と研修会を開き、より緊密な連携のもと、よりよい薬物療法を患者さんに提供できるよう努めています。また、患者さんの薬物療法に有用な情報をかかりつけ医に伝えるためのツール「連携パス」に薬剤師も情報を記入するなど、今後は薬薬連携だけでなく医薬連携も推進していきたいと考えています。

Pharmacist's profile



Keiko Kadota

門田 佳子 薬剤師



出身地

鹿児島県鹿児島市です

趣味

旅行です

スポーツ歴

以前は走ること、今は歩くこと！

薬剤師になったきっかけ

家族、親族の家業が製薬関係で、薬の話ばかり聞いて育ったため

座右の銘

なこかい とぼかい
なこよっか ひっとべ
「ぐずぐず迷っているぐらいなら、さっさと実行してしまえ」
(鹿児島弁)

医療機関の先生方へ

市川総合病院 診療情報提供書

検索

当院と地域の病院・診療所の先生方との間で、患者さんのご紹介などを円滑に行えるように、「地域医療連携室」を設置しています。ご不明な点がございましたら、下記へお尋ねください。

患者支援センター地域医療連携室 TEL 047-322-0151(内線2214) FAX 047-324-8539(直通)

開室時間 月曜日～金曜日:午前9時～午後5時 土曜日:午前9時～午後1時(第2土曜日は休診日)